HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	成瀬巳喜男と＜不確かさ＞の映画：１９５１年以降の作品を中心に [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	黄, 也
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第14568号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/81432
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Ye_Huang_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：黄　也

主査　教　授　　阿部　嘉昭
審査委員　副査　教　授　　応　雄
副査　准教授　　浅沼　敬子

学位論文題名
成瀬巳喜男と＜不確かさ＞の映画――1951 年以降の作品を中心に

・当該研究分野における本論文の研究成果

戦前の松竹蒲田で監督デビューを飾り、ＰＣＬ（のちの東宝）に移籍、映画全盛期から 69 年の映画凋落兆候期まで成瀬は生涯で 87 本（現存作品は 69 本）の作品を撮った。その厖大な作品群は、実際は多様性に彩られており、各作品の差異的な指摘が煩瑣なことから、従来、「女性映画の巨匠」「メロドラマの名匠」と抽象的に括るような評価が目立っていた。この点、本論文は、成瀬生誕 100 年時点での分析など諸言説を綜合しつつ、そのうえで＜不確かさ＞という成瀬の作品のありように着目し、それに精緻な映像音響分析などを肉付けすることで、意欲的な成瀬論を樹立している。章立てされているのは計９本にすぎないとみえるが、随所で成瀬の他作品への言及を織り込み、綜合性が目論まれているといえる。同時に、現状の成瀬論のように、フェミニズムやポストコロニアリズムなど既存の解読の枠組みに依存せず、具体的な「画面」分析を軸に、立体的で血のかよった成瀬像を提示することに成功している。空間表象、顔を中心にした身体表象、時間表象など、眼目に置くもののバランスも良く、成瀬作品のジャンル規定を細部実証により転覆させてゆく手順も戦略的である。

とりわけ、『めし』の章における（原節子の）「足」、『晩菊』の章における「手」、『女が階段を上る時』における「横臥」、『浮雲』の章における「歩行と移動」、『乱れる』における（高峰秀子の）「疾走／停止」の同時性、『乱れ雲』における（司葉子の）「潤う目」など、俳優身体の細部や換喩性への着眼点が独創的で、分析が精緻である。この点を最大の研究成果と捉えたい。物語ではなく、俳優身体の実相から映画の別局面を浮上させるこの分析方法は、学位申請者の今後の研究精度を保証するものとなろう。

・学位授与に関する委員会の所見

審査委員会は本論文が上述の点において充実した研究成果を挙げていると評価する。

しかしながら画面分析の精密さが際立つ章もあれば、自説の証明を優先して分析の恣意性が目立つ章もあった。とくに既存のメロドラマ論からの成瀬作品の逸脱を証明しようとした章を含む第三部ではその傾向が強い。またディテールに富む成瀬作品の批評に値する名場面が、論旨の単純化のため数多く捨象されている点も口頭試問で説明を求められた。

審査委員会で問題とされたのは、本論文が頻用する＜不確かさ＞の概念の恣意性であった。何より論述の前提部分で鍵語の＜不確かさ＞の内実として即座に類推できる不確定性のほか、「定義不能性」「未了性」「多元性」「ジャンル逸脱性」「中間性」「場所がふたつあること」などの拡がりを含むとあらかじめ具体例をあげて明言すべきだった。また＜不確かさ＞を提示するのに＜確かなもの＞から＜不確かさ＞を摘出する論理的・説得的な展開をより丁寧に図ってほしかった。細かいところでは、四人の男に関わる帰趨が相互対照的、正確に結論づけられる『女が階段を上る時』はむしろ＜確かな＞作品と捉えたほうが論理構成が鮮明になる点、成瀬の代表作『浮雲』では作品を観終わっての観客の反芻のなかで作品全体の「時間」が厚みをもった＜不確かなもの＞に変貌する点などが指摘された。

審査委員会では、これらが、既存発表論文で展開した緻密な作品考察を＜不確かさ＞という主題で括りなおすにあたって生じた論理的一貫性における若干の不備に起因していることを、口頭試問を経て確認した。学位申請者は、今後時間をかけて補填すると具体的な内容を示しながら約束した。申請者にはそれが可能な真摯さ、画面分析力、論理性、さらに文献博捜力があるとも確認できた。以上を踏まえ、本審査委員会は全員一致で学位申請者に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。